

繋ぐ

旭野高等学校 2 年 神谷 紗桜

中学生の頃、担任の先生は私達に
「大切にしている言葉があります。」
と言った。先生は時々、格好つけた言葉を使う人だった。そのため、私は一体どのような
素敵な言葉を教えてもらえるのだろうか
と好奇心をそそられた。少し身構えつつ待っ
ていると先生は言った。

「全力でやれ。」
もう少し格好良い言葉を期待していたが、意
外とシンプルな言葉だった。中学生の私には
あまりしっくりこなかった。しかし高校二年
生になった私の心にはこの言葉がズシンと
重く響く感じがする。

中学校最後の一年間はとても充実した時
間だった。様々なことに挑戦したかったため、
生徒会に入ったり、合唱の伴奏をしたりして、
卒業式には答辞を読んだ。今考えると、学校
生活に関しては「全力」だったといえるかも
しれない。

部活動のバレーボールでは「全力」だった
のか。恥ずかしいことに、そうとはいえない。
はっきり言って努力していなかった。卒業式
で答辞を読んだとき、私は序盤から号泣した。
部活動のことについて話しているときだっ
た。涙の正体は卒業への悲しみではなかった。
バレーとしっかり向き合っていなかった自
分に対する後悔、そしてこのことをきれいな
言葉で語ろうとする自分に嫌気が差したの
だ。私はバレーを通して、先生の言う「全力」
の意味を理解しようとしなかった。

高校ではバレーと真剣に向き合うようにな
った。チームメイトのみんなに刺激を受け、
中学校のときに開いてしまったレベルの差
を縮めてみんなに追いつけるよう、練習に励
んだ。一年間で、できることがだいぶ増えた
と思う。

先輩が引退して、必然的に試合に出る機会
が増えた。しかし、みんなとの差は試合経験

の差でもあった。試合慣れしていない私は、
自分のプレーを信じ切れてなかった。ミスや
消極的なプレーもあったが、私は試合に出さ
せてもらっていた。何の根拠もなしに、安心
していた。まだ大丈夫だと思った。

「最近、紗桜の競争心がなくなっている。」
あるときそう言われて、私は目が覚めた。
一年生のときは一秒でも長くコートに立ち
たくて必死だったはずなのに、少し試合に出
れるようになったからといって、いつしかそ
の状況に甘えるようになっていた。バレーに
対して少しずつ中途半端になっていく自分
に、きっとどこかで気付いていたと思う。
私は見て見ぬふりをしたのだろう。

「全力でやれ。」
ふと思い出したこの言葉が、私の心にズンと
重く響く。あのときは何も感じなかったのに。
先生は、

「この言葉は、先生が学生時代野球をしてい
た頃に恩師に言われた言葉です。レギュラー
メンバーとして試合に出ることに慣れてしま
い、練習を真剣にやっていなかったときに
恩師からこう言われたことで、はっとして練
習に一生懸命取り組むようになりました。」
当時これは私にとってただの思い出話にす
ぎなかった。しかし、今はこの話にひどく共
感する。そして練習中にもこの言葉を思い出
し、今のプレーは全力でボールを繋ごうとし
た結果なのか、それとも気の緩みがあったの
かと考える。もし先生の言葉がなかったら、
私は今でも中途半端な気持ちで消極的なプ
レーばかりのつまらないバレーをしていた
かもしれない。

言葉は繋がると思う。先生は恩師だと言っ
ていた人の言葉に支えられている。そしてそ
の言葉を中学生だった私達に繋ごうとして
くれた。あのときは「全力」という言葉が抽
象的すぎてよく分からなかった。しかし、先

生と似た経験をしたことで、「全力」というシンプルな言葉が胸に刺さる感覚を理解した。そして今、私は先生の言葉に支えられている。

「全力」とはなんだろう。最後までボールを追うこと、あきらめないことだろうか。私はチームメイトと比べると劣る部分が多い。だからこそ、できないということが理解できる。誰かが悩んでいるときにその気持ちに寄り添って一緒に考えること。これも「全力」の一種だと思う。私は「全力」で何かと向き合った先で、なりたい自分になれると考えている。私は自分を信じられる人になりたい。そのために「全力」で練習して、まずは自分のプレーを信じられる人を目指そうと思う。

「全力でやれ。」

この言葉を、私は次に誰へ繋げば良いのだろうか。部活動の後輩だろうか。先生のように、大人になってからどこかの子どもにそう言うことになるのだろうか。

「全力でやれ。」

この言葉を繋ぐべきときはいつだろう。その日が来るまで、私は「全力」でボールを繋ぐ。

